

早乙女貢

おけい

上

乙女貢

おけい

上



朝日新聞社

おけい上

定価 八五〇円

昭和四十九年六月二十日 第一刷発行

著者 早乙女 貢

発行者 朝日新聞社 岡見 璋

印刷所 図書印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京・名古屋
大阪・北九州

© 早乙女 貢 一九七四年

0093-254218-0042

目次

序章	コロマの道	5
第一章	雪　　転	15
第二章	潮　　騒	44
第三章	夜の貌	92
第四章	いくさ雲	154
第五章	炎の山河	217
第六章	女のいくさ	254

題 挿
字 絵
早 三
乙 井
女 永
貢 一

お
け
い
上

序章 コロマの道

一

カリフォルニア州では乾季^{ドライ}になると一滴の雨も降らないという。季節は雨期に入ったのだろうか、その雨が叩きつけてきたとき、私は車の中で、うとうととしていた。

まだ夜の色が残ったフリーウエーである。単調な禿山と散在する牧場の間を八〇号線が走っていた。さすがに夜の州道は車が少なく、時速九十マイルで何時間も走っていると、車はまるで軌道の上を運ばれているような安定感があった。二十五ドルの保証金で借りたピントは快調にインディアン・サマ一の夜を飛んだ。

二年前にこちらにきてはじめて免許証^{ライセンス}をとったというN青年は、煙草をとり出すときや、地図を見るとき、ハンドルから両手を離れた。左右に広大な禿山の起伏がつづくフリーウエーは、そのまま、二、三百メートルも一インチの狂いもなく、車を走らせる。リミットを超えて百マイルが平均という速さもこの広さの大陸では当然のことに思える。

「百年前は、ここはどんな道だったろう、ごろた石の細い、馬車が一台通れるくらいの道だったろう

な」

サンフランシスコを出て間もなく、落陽に照らされた禿山を眺めたとき、私は、旧満州の山々を思い出したものだ。

満州の山々は文字通り禿山が多かったが、このアメリカ西部の山のそれは、同じ褪せた褐色でも近よってみると意外に草が生えている。牧草になるのか、十インチばかりの草が生えているのだが、これが山肌と同じ色合いなので、少し離れると禿山にしか見えない。

「秋だから」と、私は言った。「少し早いようだけど、もう末枯れはじめているのか」

N青年は笑って、私も最初そう思ったんですが、いつもあんな風なんですよ、と言った。

どう見ても枯れ草だった。春も緑にならない草。水の豊かなわが国では考えられない乾いた風景だった。この乾きは、緑の豊かな国土に育った私たちを一種の失望とともに原始の荒々しい感情で揺さぶらずにはいない。サンフランシスコの百五十万坪に及ぶ鬱蒼たる森林公園が、草一本ない砂漠に他処から持ってきてきて植林した成果であると聞かされても、信じ難かったのと表裏をなしていた。部分的には熱帯のジャングルを思わせる、その緑と、豊かな日蔭をつくるために、スプリングラーが絶え間なく動き、一日の水の消費量三百万ガロンという贅沢でしかし効果的な方法によって、死んだ土地を甦えらせていたのである。

（――百年前までは、しかし、考えられないことだった……）

私は、窓外に流れる禿山を見ながら、思った。

フリーウエーは、この山の腹を無惨に断ち、盆地を貫き、裾を削って、東へ延びていた。

ごろごろ道のころ、幌馬車ががたと、夜を日について走ったことであろう。西部の荒蕪地帯に慣れた人々には、さして苦にならなかったことも、異国の、豊かな四季にめぐまれて育った者の目に

は、どれほど絶望的な、殺伐さに映じたことであろう。

黄塵と熱病と、インディアンや無頼漢の襲撃は日常のことであつたと、西部開拓史は伝えている。一八四八年サクラメント近郊コロマで金塊や砂金が発見されてからゴールド・ラッシュとなり、東から北から南から、黄金亡者たちが集つてきた。やがて金鉱は掘りつくされ、廃墟を残して人々は去つたが、人間の軌跡は何らかの文明を残さずにはいない。サンフランシスコからコロマへの道、川路と陸路で開拓され、サクラメントの町が過熱状態のときには一年の間に七百人から五万人にまでふくれ上がったといわれる。

サクラメント市は州都になっているが整然として冷たいくらしいの官庁都市で、私たちが入ったときは五時を僅かに過ぎたくらいなのに、商店はほとんどが店を閉ざして、硬い表情だった。かつて荒くれた酔いどれたちが、酒瓶と拳銃をふりまわしていたおもかげを伝えるものは、市の北郊にあるオールドタウンくらいのものであった。歴史的遺跡として補修工事が進んでいたが、われわれの概念にある西部劇調の街よりは新しいようであつた。

コロマへの道は、サンフランシスコからなら、必ずサクラメントを経由する。陸路は前記の八〇号線だが、川をゆくなら大盆地に切りこんだグリスリー湾からサクラメント河を遡り、支流のアメリカン河に舳をむけることになる。

ミシッピの外輪船は著名だが、あれと同じようなものであつたらう。アメリカン河は二十数マイルでフォルサム湖に辿りつく。

この湖を縦断すれば、また川を遡って、コロマ村へゆきつくことになるのだが、百年前には、その船便はなかったのかもしれない。

記録は、サクラメントまでを示しているにとどまる。かなりの急流であるし、兩岸の樹木が蔽いか

ぶさって、舟の航行を阻んだのかもしれない。

話が飛んだが、私がコロマへの道を辿ってゆく途中で、そのことに気がついたのは八〇号線とはオーバンで別れてからである。オーバンは百年前に立てられた火の見櫓をそのまま残している古い静かな街で、四九号線との分岐点だった。アメリカのように歴史の浅い国では、百年前のおもかげでも史跡として貴重になる。ヨーロッパや東洋の歴史の深さ厚さが、アメリカには口惜しいのであろう。史跡保存には、かなりな熱意を燃やしている様子が、このあたり一帯で見受けられた。ヨーロッパのような石積み建築が少ないから、コロマ村では、牢屋までが大変な史跡になっていた。中世のような方鉄骨のまるで荷造りのような檻まであった。

二

このオーバンの街も御多分に洩れず金鉱熱の恩恵を蒙ったところだが、四通八達の要衝だけに当初は駅馬車の中継地が、宿場街として発展していったものであろう。五叉路になった街の中心部に近く急な坂に階段式につながった店構えが、そのまま残っている。二階の露台や、太い柱の狭い入口や、矢狭間やへさまのような看板の様式に、西部特有の表情がある。銀行がある。一八八七年ときざまれた銅板看板がはっきりと見える。私は、以前、山陽線の尾道駅の手前で、汽車が何故か十分ほど停車したとき目の下に土蔵造りの備前銀行というのを見たことを懐かしく思いました。あれは二十数年も前のことだから、いまはどうなっているか知らない。むろん、このオーバンでも銀行の建物だけで中は洗濯屋になっていた。

南へ坂を登って暫くゆくと、新しい街がある。歴史的な街のたたずまいを残すため、中心部をずら

してあるのだ。そこを通りすぎるとたちまち山の中に入る。深い谷底と、亭々たる針葉樹の高峰が連なっていて、表情は一変する。下界から一度に紀州高野山の上へ連れて来られたような急激な変化であった。

ここはすでにエル・ドラド（黄金郷）である。シエラネバダ山脈に踏込んでいたのだ。このカリフォルニアとネバダの境界をなして南北に走る山脈の雄大さは、正確な地図を望むべくもなかった。初めての旅人には、前途に不安を抱かせたに違いない。四九号線は一車線であるが、一級舗装道路で、山の間を白く蛇行して走っている。その行先を見定めるには深い森林が遮っている。州道からの変りようが極端なせいであろうか、何やら深い山中に迷い込む感じは拭えない。

もしも落魄の人々が、この道を辿ったとすると、馬車の漸く通れる道はあっても行先に果して何があるか、人家があるとは信じられない恐怖におののいたことであろう。日本の山と違って、初めての異郷の不安は倍加されたに違いない。この山中で、私は再びカリフォルニアの雨に見舞われた。

九月十月がインディアン・サマーと呼ばれる最も暑い季節だけに、雨は猛烈であった。八〇号線ではとうとうとしていたので、降りだしを知らなかったが、曇った空の向うに、天の灰色がそのまま滲みをひろげて森林に蔽われた山々を包みこみ、その奇怪なまでの空漠のひろがり、やがて車に襲いかかってくると思えた。激しい雨脚が樹々を叩き、ハイウエーを叩いて、しぶきをはねあげて迫ってくるさまは異常なまでに恐怖的であった。南から北への雨雲の進行に向って、ピントをふっ飛ばして行ったことで、あたかも、怒濤の中に突込むような結果になったようである。

ボンネットに滝しぶきが上がり、フロントガラスが割れるかと思われるばかりの豪雨だった。ワイパーが忙しく動きだしても間に合わない。右側は千仞の谷である。こちらは右側通行なので危険であった。さすがに速度を弛めねばならなかった。屋根を叩く雨は、いまにも突破って頭上に沛然と降り

かかるかと思われ、フロントはいまにも飛散してガラスの破片と雨が顔に突刺さってくるような恐れすらあった。

この豪雨は、その襲来が突然であつたようにまた、突然、ぱたりと止んだ。雨雲はたちまち遠ざかり、頭上は霽れた。山中に踏込んだ人間を嘲るような、不安を弄ぶかのような、急激な変りようであつた。杳然としているうちに、前方の空に美しい青空がのぞき、雨は未練気もなく、立去つていた。この間がどれくらいつづいたろうか。あまりにも、その退き際のあざやかさのゆえに、狐につままれたような感じだつた。振りかえると、オーパンの空は、暗灰色に蔽われて悪夢ではないことを証明していた。

もうこのあたりは標高はかなりあるはずであつた。豪雨の痕跡はしかし、たちまちのうちに拭かれたように消えてゆく。樹々の滴が陽光にきらめき、道はいつの間にか山中から平原に出ていた。そう錯覚させるほど、あたりの起伏は低くゆるやかになっていて、放牧の馬や牛が見えた。高原なのだ。およそ七マイルほどでクルルに出る。左へ折れると三八九号線で、グリーンウッドを通つて、百万ドルもの金を掘出したブラック・オーク鉱山の跡がある。

このあたりからは、遺跡といえはほとんど、金鉱と関連したものばかりである。間もなく右手に、当時は豪奢であつたろうベイリー・マンションが朽ちかけたまま（軒には野生の葡萄の蔓が延びて、小さな実を沢山つけていた）傲然とハイウエーを見おろして、最盛時の大地主の貫禄と威容を示していたのもそれなら、金鉱発見者の栄誉を銅像に残すJ・マーシャルが金を発見した個所を指さしているのも、すべてが、ゴールド・ラッシュへの懐古につながる。

しかし、私が、わざわざ、このコロマの道を辿つたのは黄金亡者を羨むためでも、一粒の砂金でも拾おうというさもししい魂胆でもない。薄幸の青春を異郷で淋しく閉じた一人の日本の少女の軌跡を追っ

てのことであつた。

三

彼女が、このコロマへの道を辿ったころはすでに、エル・ドラドはその光榮ある地名を裏切つてゐた。黄金の狂氣は去つたあとであつた。

前述の一八四八年は、わが国の嘉永元年でフランス二月革命の年にあたる。黄金熱のピークは十年間にすぎない。「死の街」^{ゴースト・タウン}や「廃坑」^{ゴースト・マイン}の地図を調べても、たいていが五〇年代で、せいぜい六〇年代の末まで。狂氣の二十年——二十年目がわが国の明治元年。日本列島を吹き荒れた勤皇攘夷の嵐と、黄金の光に魅せられたアメリカの狂氣と、びったり一致する偶然の符合は何を意味するのだろうか。十九世紀後半の、近代への夜明け前の、陣痛の苦しみを表徴するのであろうか。

彼女がサンフランシスコに上陸したのは明治二年の春である。金鉱熱は冷め、サクラメントも急激な膨張を差じるように、人口が激減していたときであつた。サンフランシスコのオッキンデンタル・ホテルの古い宿帳に、はうきりと彼女の名前が記されていた。当時の人々は、この日本の娘に異様な関心を抱いたに違いない。

コロマ村に入つた私は、アンティックの店で彼女のことを聞いた。そこはアメリカン河の南の支流に近く、ふと、この川を遡ってきたのではあるまいかと考えたのである。

「私は彼女を直接に知らないが……」と、度の強い眼鏡をかけた老婦人は太い指をあげて言った。「少し手前にパイロット・ヒルというところがある。あの道を西へゆけば、フォルサムへ出るよ。サクラメントからくるには、あの道が一番近いのさ」

オーバンを経由した四九号線はコロマから四マイルほどで五〇号線にぶつかる。そこがプラサビルである。八〇号線と大差ない距離でサクラメントに至るから、この三角点を結ぶ中を通るフォルサムからパイロット・ヒルへの道が、現在から見れば裏街道でも、当時はメインになっていたのかもしれない。

「わざわざ東京から来たのかね、彼女も喜ぶだろうよ。でも、ビアカンブの婆さんには逢わない方がいい、すっかり人が違ってしまったからね。この戦争で……」

度の強い眼鏡が私の年齢を探るように見ながら、気の毒そうに、息子を太平洋戦争で亡くしてからね、日本人嫌いになっているから、とつけ加えた。

ビアカンブ家というのは、かつてコロマ村の大半を占めていたオランダ・ランチの管財人で、いまは大農場主になっている一族のことであつた。私はここで木製のインディアン・コインを貰って、車をいったんフォルサムへと向けた。

フォルサムの存在は、現代では合衆国刑務所とダムによつて僅かに知られている。ひとたびフォルサムまで走らせてから、また逆に辿った。この道を辿りながら、彼女たちは行先に光明を見たのだらうか。深い樹立と、時折り左手に散見する溪流と。この溪流には、ます、さけ、なまずが釣れるという。河原におりと、日の加減で、ときどき、キラキラッと光るものがある。砂金であつた。ただ採算がとれないだけだが、近ごろ、また関心を持たれているようだ。まだこの川底には、発見者マーシャルの指先に応えるものがある。彼女たちは、カバー・ワゴンでことごと未知の道を辿り、あるいは、釣糸を垂れてみたかもしれない。口に合わぬ異郷の食事に飢えていた胃を、新鮮なますやさけで満たしたかもしれない。

その夜、シエラネバダ・ハウス三世という古めかしいホテルに泊つたが、暁方、また雨が降つた。

これは小雨であった。

やはり高原の冷氣と四辺の風物は、山中湖畔にでもいるような錯覚を起させた。小雨の中に、濃い真白な霧のかたまりが、雲のようにむくむくと動いて、山の中腹を隠して流れていた。そこから、ゴールド・ヒルまでは近い。いや、ここはもうゴールド・ヒルだという。昔のワイン・テストイングの看板をかけた家などがある。

小さな郵便局や前述の牢獄などのあるコロマ村を突抜けて、ブラサビルへの近道になる暗い細道を登るとすぐに左手にこぢんまりした小学校が見えてきた。エル・ドラド郡ゴールド・トレイル小^{イングリッシュ・スクール}学^{イングリッシュ・スクール}校とある。ビアキャンプの農場はその先だった。放牧の牛がのんびりと草を食^はんでいた。郵便受にビアキャンプの名を見つければ行過ぎていたろう。百年前の回廊のある二階建の廃屋と巨大な櫓^{ばしら}が見えた。この櫓は日本から持って来て植えたものなのだ。塀が歪んで農場の廢墟のようであったが、すぐ前に車庫があつて、若い男がトラックを出そうとしているところだった。歪んだ表札が直していると、犬が飛んで来、若者がおりてきた。

若者に見えたが、二十五、六で、子供があるという。フィリップという名だった。兄弟の真中で妹が一人ある。そんな話をした。

「その日本人女性なら、話に聞いている」

フィリップは言った。

「可哀想なことをした。ヘンリーが愛していたようだけど」

ヘンリーというのは、曾祖父の弟になる男で、ために一生を独身で送ったということだった。小雨の中を私たちはひきかえし小学校の裏手の丘へのぼった。見晴しのいい丘の上に一本のオーク樹がある。そのほかは岩頭が露出しただけの荒涼たる眺めである。この広い丘全部が墓場のような気がした。

丘上から眺めると、はるかに北西のかたには、アメリカン河の深い谷を越してシエラネバダの山脈が雄大な空を劃ってゆるやかな稜線を見せて横たわり、雲かと見まがう濃い霧が山麓から湧いては流れ、山腹を這っていた。

丘の上に、その墓はあった。墓碑面は真東をむいている。大理石の墓はいま作ったもののように白い。

In Memory of OKI……裏面には、奇妙な日本字が彫ってあった。

日本皇国 明治四年……月と日が彫ってあるが、数字はない。欠けたのではない。はじめから彫られてなかったのである。中央に大きく、おけいの墓、と読めた。